

げん 元期（享保～元文年間）は茶の湯の普及が目ざましく、^{そう わ}宗和流を学び、^{せん けい りゅう げん そう}千家流原叟に学んだ^{かわむらき ぜんさい}河村曲全斎が曲全流を起こし、原叟門人で名古屋に下った松尾宗二が松尾流を起こすなど、名古屋独自の流派も生まれました。

江戸期から続く商家や明治以降の新興商人の大邸宅や別荘には茶室や茶屋が設けられ、日常的に喫茶する習慣が根づきました。

② 工芸技術

本市では文化財指定されているものはありませんが、有松・鳴海絞、名古屋仏壇、名古屋桐箆笥、名古屋友禅、名古屋黒紋付染、尾張仏具、名古屋節句飾は、国（経済産業省）の伝統的工芸品に指定されています。

有松・鳴海絞の特長は絞り技法の多彩さで、「縫絞」、「くも絞」、「三浦絞」、「鹿の子絞」、「雪花絞」など、その数は 100 種類以上あります。下絵から、くくり、染色、糸抜き、湯のしまで多くの工程があり、各工程をそれぞれ専門の職人が担当します。「分業制」と呼ばれるこの工程は、約 300 年前に確立した当時のまま、今に受け継がれています。

③ 食文化

令和 3 年（2021）の文化財保護法の改正により、それまで文化財指定の対象とならなかった食文化等の生活文化も対象とする、国の登録無形文化財の制度が新設されました。本市では、食文化等の生活文化について文化財登録されているものはありません。

豆味噌と溜り醤油 日本の味噌は大豆を主な原料として、米・麦・大豆などの麴を用いて発酵させた食品で、麴の種類によって米味噌、麦味噌、豆味噌に大別されます。このうち名古屋を含む愛知・岐阜・三重では主に豆味噌が生産、消費されてきました。醤油も味噌と同様に地域色のある調味料です。全国的に生産量が多いのは濃口醤油ですが、名古屋では溜り醤油が主に生産、消費されてきました。また、愛知県発祥の白醤油も地域色のある調味料の一つです。



図 51 豆味噌

名古屋めしと名古屋の食文化 現在の名古屋では「名古屋めし」と呼ばれる料理が人気を集めています。そのなかには昭和 20 年代以降に誕生したものや広まったものも多く、比較的新しい時代の食文化といえます。ただ新しい時代に誕生した食文化でも、その背景に豆味噌や溜り醤油など長い年月をかけて伝えられてきた食文化があることによって、地域的特色のある食文化として親しまれています。

きしめん きしめんは、うどんの一種で平たい麺が特徴です。江戸時代後半に^{き た がわ}喜多川^{もりさだ}守貞が記した『^{きんせいふうぞく し}近世風俗志（^{もりさだまんこう}守貞謄稿）』には、「今江戸にてひもかはと云ふ平打うどん

を、尾の名古屋にては、きしめんと云うなり」という記述があります。ムロアジやサバの削り節でだしを取り、溜り醤油で味付けをする店もあり、幅広い麺の形だけでなく、だしや調味料も関東や関西と異なる地域的な特徴があります。

海産物と魚市場 かつては名古屋南部の海でも漁業が行われていました。主な海産物は干潟や汽水域に生息する魚介であり、『^{おわりめいしよずえ}尾張名所図会』をはじめとする江戸時代の地誌では特に貝類が高く評価されています。

魚市場は熱田と^{しも の いっしき}下之一色（中川区）にありました。江戸時代、熱田の魚市場には近国や遠国から海産物が集まり、尾張国内や美濃・信濃に運ばれていました。熱田や下之一色には海産物の加工業者も暮らしていたので、市場が開かれなくなっても練り物の製造を続ける店がありました。

特別な日の食事 冠婚葬祭や祭りの日、共同作業の時には多くの人が集まり、普段とは異なる食事をとることがありました。

うどんは、かつては各家で麺を打って作っていたので手間がかかり、普段の食事ではなく、盆や正月、祭りや農休みの食べ物でした。滝沢馬琴の道中記『^き羈^りよまんろく旅漫録』には、名古屋の天王祭宵宮に家々でうどんを作ることが恒例であると記され、「此地のうどんはなはだよし」と評価されています。



図 52 押しずし（箱寿司）

濃尾平野では、角麩、でんぶ、シイタケ、川魚などを具材とし、木枠を重ねた押しずし（箱寿司）が作られました。また、守山区など尾張北東部では秋祭りに、サバの中に寿司飯を入れて作るサバ寿司が作られました。

年末の市場には新巻鮭が並び、家庭によっては正月にはハゼの甘露煮、年越しの夜にはイワシの丸干しを食べることもありました。

正月には、すまし汁に四角の餅や餅菜（正月菜）を入れ、鰹節を振りかけた簡素な雑煮を食べる家庭が多く、かしわ、かまぼこ、シイタケなど多少の具材が加わることもあります。家庭によっては小豆の雑煮を食べることもありました。

3月の節句に「おこしもの」と呼ばれる菓子を食べる習慣があります。現在では市販されたものを購入できますが、かつては家庭でも作られました。米粉を練り、雛人形、鯛、扇子、熨斗などさまざまな種類の木型に入れて形を作りました。木型を起こして取り出すので、「おこしもの（おこしもん）」、「おし



図 53 おこしもの

もん」、「おこしもち」などと呼ばれるようになったといわれています。着色した米粉を加えて彩りを加えて、蒸したのちに砂糖醤油などを付けて食べました。

菓子 名古屋では、江戸時代に茶の湯が普及したことによって和菓子の製造も盛んになり、藩御用達の菓子店は尾張藩との結びつきのもと菓子を生産しました。江戸時代以降も多くの店が創業し、現在も名古屋の和菓子文化の一端を担っています。

日本酒 名古屋の日本酒生産は旧城下町や街道沿いの地域を中心に発展しました。『名古屋市史（産業編）』によると、江戸時代後期には盛況で1800年代半ばの酒造業者は150戸に及びましたが、明治時代になると他地域の酒が流入したこともあって明治14年（1881）には52戸、明治44年（1911）には23戸と減少を続けました。

昭和30年代以降は合併により緑区鳴海・大高、中川区戸田など酒醸造が盛んな地域も市域に含まれるようになりましたが、それらの地域でも造り酒屋の数は減少を続けました。一方で現在も日本酒醸造を続ける業者もあり、人気を集める地酒もあります。

外食文化 明治時代になると外食の機会や種類が増えました。明治4年（1871）に刊行された『なごやかくぎょうひとりあんない名越各業独案内』には西洋料理店の情報が記されています。また、第10回関西府県連合共進会の会場では西洋料理店やミルクホールが出店しました。

大正時代以降は繁華街など人通りのある場所で、食堂、カフェ、喫茶店が流行り、デパートにも食堂が設けられました。

昭和20年代以降、安価に食事ができる食堂では、うどんや中華そば、とんかつやカレーライスなどさまざまな料理が提供されました。デパートの食堂では家族連れでも気軽に楽しむことができました。

昭和40年代までは繁華街に屋台が並んでいました。飲食の屋台は戦後の混乱期に急速に増加して昭和30年には1,000軒を超え、現在名古屋の名物とされる味噌串カツやどて煮なども提供されました。

喫茶店 名古屋では多くの喫茶店が、コーヒーなど飲み物の料金のトーストや卵などがセットになるモーニングサービスを提供しています。モーニングサービス発祥の地域については諸説ありますが、名古屋では繁華街や新興住宅地で発展し、現在では喫茶店文化の一つとして定着したと考えられます。

（4）民俗文化財

① 有形の民俗文化財

市指定有形民俗文化財が18件あります。その内訳は、うまじるしおよび馬標及び馬具が10件、石造物（つきまちひ月待碑、じゅうしちやまちくようひ十七夜待供養碑、だんじり六地藏石仏、じゅうおうぞう双体地藏石碑、こうしんとう庚申塔）が5件、そのほかに車楽、医薬器具、十王像各1件があります。石造物には具体的な年代が記されている

ものもあり、かつての民俗行事の姿を知る手がかりになります。

市域の生業をみると城下町を中心に商工業が発展し、諸職の活動が行われました。かつての市域は大部分が農地で、稲作や畑作、養蚕などの農業が行われました。また、沿岸部や丘陵地などの環境に応じて、漁業や亜炭採掘業などの生業が展開しました。それぞれの生業で用いられた生産用具は、生業と環境の特徴を示すものであり、それ自体が地域色のある有形の資料（民俗文化財）です。

諸職関係資料 江戸時代には城下町を中心に商工業が発展しました。職人の道具、販売用具、製造見本などの商工業に関する資料は、それぞれの家や関連企業で伝えられ、博物館施設に収蔵、展示されているものもあります。

漁業関係資料 本市の南に広がる海は、かつては干潟の広がる浅海であり、大小さまざまな河川の流れ込む汽水域でした。沿岸部には漁業が行われていた地域もあり、農業と兼業で漁業が行われる地域もありました。中川区下^{しも}之一^の色^{いっしき}は昭和 30 年代後半まで、伊勢湾奥部における漁業の中心地であり、湾奥部を中心に 30 種類以上の漁法がありました。

昭和 30 年代以降、漁業が行われなくなっているからは、下之一色の漁具は元漁師の方々が集めて保管するなどさまざまな機会に収集されて、現在は名古屋市博物館が所蔵しています。一群の資料からは、汽水域を中心とした浅海の環境に応じて、伊勢湾奥部で漁業が展開したことがわかります。



図 54 下之一色漁業資料

亜炭採掘用具 市域の東部には丘陵地が広がり、名東区や守山区には亜炭採掘が行われた地域もありました。名東区高針付近は特に亜炭採掘が盛んであった地域で、明治 30 年以降に産業として本格的に亜炭採掘が始まり、昭和 20 年代まで名古屋の市街地に燃料として出荷されました。高針の亜炭採掘用具の一部は名古屋市博物館が所蔵しています。

月待供養碑 特定の月齢の夜に月の出を待ち、願い事をする月待の行事に関するものとして、天正 17 年（1589）の銘がある浜神明神社（瑞穂区）の十七夜待供養碑、文禄 5 年（1596）、寛永 7 年（1630）、寛永 16 年（1639）の銘がある観聴寺の月待供養塔が市の有形民俗文化財に指定されています。守山区には上志段味^{かみしだみ}の勝手社脇に明治 38 年（1905）、中志段味の諏訪社には明治 31 年（1898）、下志段味の八幡神社には明治 37 年（1904）の銘がある月待供養塔が残されています。



図 55 浜神明神社の十七夜待供養碑

地蔵像 石造の地蔵は鎌倉時代に始まったといわれています。大喜寺（瑞穂区）の地蔵像は鎌倉時代のものとされ、成道寺（南区）の地蔵には永正12年（1515）の銘があります。大永7年（1527）に建立された安栄寺（北区）の六地蔵、江戸時代初期の銘がある性高院の双体地蔵石碑は市の有形民俗文化財に指定されています。

庚申塔 庚申の日に集まって、夜眠らずに過ごす庚申講の行事が伝えられた地域もありました。60年に一度の庚申の年には講ごとの結願の記念として石造の庚申塔が建てられ、市内の寺社などにも残されています。市の有形民俗文化財に指定されている長久寺（東区）の庚申塔は、詳細な経緯については不明ですが、刻銘によって武蔵国の武士が寄進したことが確認できます。

観音像 熱田区、港区、中川区にかけての地域では、熱田新田の開発に伴って勧請された三十三の番割観音がまつられ、巡拝することが行われています。

龍泉寺は本尊が馬頭観世音菩薩で、境内に数多くの馬頭観音が寄進されています。馬頭観音は馬方衆の厚い信仰を集めており、市内でも街道筋の辻や寺院の境内に数多く残されています。

青峯山信仰の石仏 青峯山正福寺（三重県鳥羽市）は、伊勢湾内外から海上安全の信仰を集める寺院です。かつては名古屋市内からも海に関係する仕事に就いていた人が参拝に出かけました。さらに、現地に直接参詣するだけでなく、独自に青峯山の堂や祠を建てて、分祀することが行われました。市内で青峯山信仰が伝えられた地域は、南区や緑区を中心に分布しています。それらの地域は、かつて海に面していた新田地帯や海に関係する生業の盛んな河口部でした。



図56 青峯山石仏（緑区大高町）

郷土玩具 郷土玩具は、地域に伝わる信仰・祭礼・風習などを題材とした玩具の総称です。主に木や紙、粘土など自然の素材を用いて手作業で生産されることが多く、土人形・張り子などが含まれます。名古屋は国内有数の郷土玩具の生産地であり、愛好家が集う地域でした。山車を模した土人形や張り子、馬の塔を模した藁人形をはじめとして、名古屋市の祭礼や信仰行事を題材とした多くの郷土玩具が生産されました。



図57 郷土玩具

② 無形の民俗文化財

県指定無形民俗文化財が棒の手の2件、市指定無形民俗文化財が33件の計35件が文化財指定されています。市指定の内訳は、山車行事が24件、棒の手が5件、その他名古屋港筏師一本乗り、きねこさ祭、木遣り音頭、オマント（馬の塔）行事の各1件となります。

無形民俗文化財に関する行事の多くは夏や秋に行われ、特に夏になると、疫病除けや無病息災を願う天王信仰に関連した天王祭が各地で行われています。山車行事も天王祭の行事として始まったと考えられています。西区や中村区に数多く分布する屋根神には、津島社、秋葉社、熱田社が祀られることが多く、天王信仰に関連した側面もあります。

大山と車楽の行事 現在、市域の山車行事では名古屋型と呼ばれる山車が登場しますが、それ以前には大山と車楽という山車が登場しました。その古い時代の例としては、熱田の南新宮社天王祭で文明年間（1469～1487）にさかのぼります。南新宮社天王祭に大山と車楽が登場したのは昭和時代までですが、現在は形を変えて熱田まつりが開催されています。現在では、那古野神社（中区）や富部神社（南区）に車楽が伝えられ、富部神社の車楽「高砂車」は市の有形民俗文化財に指定されています。

城下町の山車行事と名古屋型の山車 江戸時代以降、城下町の祭礼を中心に名古屋型と呼ばれる山車が登場します。名古屋型の山車は、からくり人形、二層造り、唐破風の屋根と四本柱、前棚や高欄、大幕と細長い水引幕、外輪の車輪と格子状の輪掛け、楫棒が地面と平行に車体の前後に伸びた梶棒、屋根を上下させるセリ上げ装置などの特徴があります。

山車の前棚には、ざい振り人形などの前人形、四本柱内に主役のからくり人形が載ります。名古屋城下では、元和6年（1620）に名古屋東照宮祭に参加した橋弁慶車に初めてからくり人形が載りました。その後、名古屋型の山車にもからくり人形が載るようになりました。

からくり人形の技術は専門の人形師によって発達しました。倒立、肩車、文字書き、面かぶり、湯取神事、二福神、綾渡りなどさまざまな種類のからくり人形が現在に伝えられています。

東海道沿いの山車行事 緑区の鳴海や有松、南区の本星崎など東海道沿いの地域の祭礼にも山車が登場することがあります。鳴海祭（表方）の山車行事では単層の囃子台が登場し、鳴海祭（裏方）の山車行事の山車は、知多型の山車様式を残しています。

有松祭りでは、東町（橋東）・中町（中之切）・西町（西之切）が山車を曳き出していま



図 58 若宮祭りの福祿寿車

す。もともと有松の祭礼は馬の塔や笠鉦^{かさぼこ}が登場する祭礼でしたが、明治時代以降、山車行事の性格を強めました。

農村部の山車行事 かつて農村部であった中川区戸田、同区牛立^{うしだて}、西区比良^{ひら}、守山区大森の祭礼でも山車が登場することがあります。これらの地域で山車が登場するのは、豊作の年などに限られていました。

戸田の戸田祭りは笠鉦の祭りとして始まりましたが、寛政8年（1796）から山車祭りに変わりました。牛立と大森では、天王祭に山車を曳いています。比良でも天王祭に山車が曳かれていましたが、現在は隔年秋に曳き出されています。

神楽屋形 神楽とは一般に神前で奉納する音楽や舞踊のことですが、尾張地方では装飾を施した屋形を神楽、あるいは神楽屋形などと呼びます。神楽屋形は、本来は獅子頭を持ち運ぶためのものでしたが、さまざまに装飾されるようになりました。また、太鼓が備えられ、竹を細く削ったばちで叩くという特徴があります。

現在、市内では58基の神楽屋形が確認できます。中川区下之一色では、4基の神楽屋形が2年に一度行われる一色祭りに曳き出されています。港区新茶屋五丁目の神楽屋形には「文政庚寅十三歳^{ぶんせいこういんじゅうさんのとし}」（1830）と銘記されており、神楽から派生した男獅子舞も継承されています。神楽屋形の芸能の一つとして、子供獅子を伝える地域もあります。中村区烏森^{かすもり}では、三つの地区がそれぞれ神楽屋形を所有し、子供獅子を伝えています。

馬の塔と棒の手 馬の塔（馬の頭、オマント）とは、鞍の上に標具などを立て、馬道具で飾った豪華な馬を奉納する行事です。尾張から西三河にかけて広く分布し、市内では熱田神宮、大須観音、荒子観音（中川区）、龍泉寺^{りゅうせん}の周辺の村が連合して奉納する場合や村ごとに奉納する場合があります。多くの地域で馬の塔は行われなくなり、現在で



図59 東海道沿いの山車行事（緑区有松祭り）



図60 農村部の山車行事（中川区戸田祭り）



図61 神楽屋形（港区茶屋神楽）

は実際に馬が登場するのは大森郷祭^{おおもりごうまつり}のオマント行事（守山区）のみですが、馬の塔で使われた馬道具は各地で保管され、その中には市の有形民俗文化財に指定されているものもあります。

棒の手は、棒や木刀、長刀、鎖鎌などを用いた武術的な芸能です。市域の東部では棒の手と馬の塔の結びつきが強く、棒の手は馬の塔の警固とされます。現在も各地でさまざまな流派が伝えられ、祭礼などの機会に各所で実演されています。

きねこさ祭り 中村区岩塚の七所社では旧暦 1 月 17 日に、役者と呼ばれる人々を中心としてきねこさ祭りが行われます。当日の午後には庄内川に立てた竹の折れた方角で吉凶を占う竹占が行われます。その後、七所社境内で、12 人の役者（太鼓・笛・獅子頭・後振り^{うしろぶ}・犬・鷹・コサ・杵・イミホコ・稚児・傘鉾^い・射手）による所作が行われます。きねこさ祭りの行事には中世の田遊びや田楽の面影が残ると考えられています。



図 62 きねこさ祭り

木遣り音頭 木遣り歌とは、山から伐り出した材木を運ぶ時や社寺建築の時に、力を結集するためにうたわれる労働歌であり、転じて祝儀などの際にもうたわれます。天白区平針は街道が合流する地域であり、宿駅でもあったので、信州や三河などの山林地域から木遣り歌が伝わったといわれ、現在は針名神社天王祭^{はりな}で披露されています。



図 63 木遣り音頭（天白区平針）

筏師一本乗り 尾張藩領であった木曾の材木は筏に組まれ、木曾川を通じて熱田の白鳥^{しろとり}にあった材木場に運ばれました。江戸時代以来の筏を取り扱う基本的な技術は、名古屋港周辺や堀川で木材の運搬をしていた筏師に受け継がれました。

巻藁船と提灯山 巻藁船は津島天王祭りの祭り船を模したもので、1 本の柱に 12 個の提灯を飾り、その下に 365 戸の提灯を半円状に飾り付けているのが特徴です。かつては熱田神宮の祭礼や下之一色の一色祭りにも巻藁船が出されました。現在の一色祭りでは巻藁の屋形が陸上で飾られています。

複数段にわたって山状に提灯を取り付ける提灯山は市域の北部に分布し、提灯で文字や絵を形作る提灯トボシは市域の南東部で伝えられていました。

石取車・傘鉾車・梵天車 名古屋では山車行事以外にも、さまざまな形態の祭り車を伴う行事が伝えられています。石取車は三重県桑名市の石取車を導入したもので、三輪、高欄の付いた台、真ん中に1本の柱を立てるという構造で太鼓や鉦を備えます。傘鉾は市内の広い地域で祭礼に飾られ、傘鉾の台に車輪を付けた傘鉾車が登場する祭礼もあります。梵天車は江戸時代に突如流行した祭り車です。中区大須では改修された梵天車を活用して祭礼が行われています。

大人形 緑区、南区など市域南東部では、秋の祭礼に大人形が登場することがあります。大人形の多くは赤い顔をした^{しょうじょう}猩 猩の人形ですが、なかには天狗、七福神の布袋や寿老人の大人形が登場する祭礼もあります。大人形の構造は竹で骨組みした胴体に頭や衣装を付けたもので、中に人が入ると高さ2mを超すものもあります。

(5) 記念物

① 遺 跡

国の特別史跡が名古屋城跡（中区）の1件、国指定史跡が5件、市指定史跡が5件の計11件が文化財指定されています。

遺跡の種別では、貝塚が^{おおぐるわ}大曲輪貝塚（瑞穂区・国指定）の1件、古墳が^{はち}八幡山古墳（昭和区・国指定）、^{まんやま}志段味古墳群（守山区・国指定）、^{しだみ}断夫山古墳（熱田区・国指定）など6件、城跡が大高城跡（附 ^{わしづ}丸根砦跡 ^{わしづ}鷺津砦跡）（緑区・国指定）、名古屋城跡（国指定）の2件、碑が^{かりあつ}千鳥塚（緑区・市指定）、^{かりあつ}刈跡塚（翁塚）（西区・市指定）、芭蕉最古の供養塔（緑区・市指定）の3件となります。古墳の件数が最も多く、集落跡、戦争遺跡、社寺跡、交通や生産関係の遺跡などの指定はありません。

大曲輪貝塚は縄文時代前期を中心とする貝塚で、昭和16年（1941）に、東海地方において縄文時代の遺跡として初めて国の史跡になりました。志段味古墳群は、4世紀前半から7世紀にかけて断続的に古墳が造営され、大型前方後円墳から小型円墳までさまざまな形、大きさの古墳がみられます。



図 64 名古屋城跡



図 65 志段味古墳群（志段味大塚古墳）

大高城跡（附 丸根砦跡 鷲津砦跡）は、^{えいろく}永禄3年（1560）の桶狭間の戦いにかかわる城砦で、近年、発掘調査が進められています。名古屋城跡は近世城郭完成期の高度な築城技術を結集して築かれた城郭と評価されています。市指定史跡の3件の碑は松尾芭蕉に^{じょうきやう}関係するものとして、同時に指定されており、名古屋の特色を表すものといえます。千鳥塚は貞享4年（1687）11月に建てられたもので、芭蕉存命中の碑として貴重です。



図 66 断夫山古墳



図 67 千鳥塚

未指定の遺跡で、遺構等が良好な状態で残存しているものに、貝塚では縄文時代前期を中心とする^{ほこのき}銚ノ木貝塚（緑区）、集落では弥生時代の環濠集落である見晴台遺跡（南区）、城跡では末盛（森）城跡（千種区）、生産関係の遺跡ではH-G-101号窯（千種区）など東山植物園内に分布する窯跡群、経済・生産活動にかかわる遺跡では新田開発に伴う^{こめだか}込高^{こめだか}新田堤防跡（緑区）があり

ます。また、未指定の古墳のうち、墳丘が残存する大型の古墳として小幡長塚古墳（守山区）^{お ばたながつか}、小幡茶白山古墳（守山区）^{お ばたぢやうすやま}、守山白山古墳（守山区）^{もりやまはくさん}、白山神社古墳（中区）^{はくさん}、白鳥古墳（熱田区）^{しろとり}、一本松古墳（昭和区）があり、比較的残存状況が良い群集墳として高蔵古墳群（熱田区）があります。そのほか、重要遺跡でありながらも、未指定かつ残存状況等が明確になっていないものに、尾張徳川家墓所の尾張藩御廟所遺跡（東区）^{お わりはん ご びやうしよ}があります。

② 名勝地

国指定名勝が名古屋城二之丸庭園（中区）の1件、市指定名勝が旧「^{あ ゆ ち が た}年魚市湯」展望地（南区）の1件、国登録記念物（名勝地関係）が鶴舞公園（昭和区）の1件の、計3件が文化財指定、登録されています。

名古屋城二之丸庭園は、江戸時代に造営された北御庭と明治時代に造営された南御庭があります。北御庭は、立体的な地形造成と、大型の青石などの名石が用いられた護岸石組により、豪壮な雰囲気造りが造り出されています。旧「年魚市湯」展望地は、市域



図 68 名古屋城二之丸庭園

の南部にかつて存在した干潟（年魚市潟）を展望できた場所として、白毫寺^{びやくごう}の境内の一部が市の名勝に指定されています。年魚市潟は万葉集の歌枕で、県名の愛知の語源となったといわれています。鶴舞公園は名古屋市最初の市立公園で、明治43年(1910)に第10回関西府県連合共進会の会場となり、噴水塔（市指定有形文化財）や奏楽堂が造られました。共進会終了後には、洋風庭園と回遊式の日本庭園とを合わせもつ大公園として本格的に整備され、昭和初期には公会堂（国登録有形文化財）が建設されるなど、名古屋市の中央公園として発展しました。



図 69 鶴舞公園

未指定の庭園には、近代の庭園である名古屋城三之丸庭園（中区）、東山荘庭園^{とうざんそう}（瑞穂区）、爲三郎記念館庭園（千種区）、揚輝荘庭園^{ようきそう}などがあります。名古屋城三之丸庭園は、明治17年（1884）ごろ、陸軍将校クラブ偕行社の庭として、名古屋城二之丸庭園の一部を移築し、作庭されました。東山荘は、大正年間に整備された綿布商・伊東信一の別荘で、自然回遊式の林泉庭園が造られています。

③ 動物・植物・地質鉱物

動物 本市では文化財指定されているものはありません。

市域の北東端に位置する市内最高峰の東谷山^{とうごくさん}（守山区）は自然度の高い植生、小溪流、湿地帯を有し、多くの動物が生息する重要な自然環境となっています。哺乳類では、地域を定めずに指定された国の特別天然記念物であるニホンカモシカが確認されているほか、ニホンリス、ムササビなどが生息しています。

市域の南西に位置し、伊勢湾に流れ込む庄内川、新川、日光川の河口に広がる藤前干潟（港区）は、国内に残る貴重な大規模干潟で、渡り鳥の中継地として国際的に重要であることから、ラムサール条約に登録されています。渡り鳥のシギ・チドリ類、ガンガモ類などの鳥類が確認されているほか、ヤマトシジミ、ヨコエビ、ヤマトオサガニ、アナジャコなどが生息しています。

植物 名古屋城のカヤ（中区）が国の天然記念物、寺社境内に所在する宝珠院^{ほうしゅいん}のイヌナシ（昭和区）、大乃伎神社^{おののぎ}のボダイジュ（西区）、村上社のクスノキ（南区）の3件が市の天然記念物に指定されています。

宝珠院のイヌナシは、東海地方にのみ自生するイヌナシそのものが貴重な植物であるため、そのほかの3件は巨樹で、かつ歴史的な由緒をもつものとして、文化財指定され

ています。名古屋城のカヤは推定樹齢 600 年で、尾張藩の初代藩主義直が大坂冬の陣出陣に際して武勲を祈念し、その実を食膳に供したと伝えられています。

平成 2 年（1990）発行の『名古屋の史跡と文化財（新訂版）』で名木・樹叢として取り上げられているもの（指定文化財も含む）の多くは、台地と丘陵が広がる市域の東半部に位置します。名古屋城関係のものと、

熱田神宮関係のものが複数件あり、名古屋城及び熱田神宮が植物の面からみても貴重な存在であることがわかります。植物そのものが貴重なものとして、宝珠院、守山区のイヌナシのほか、守山区東谷山のシデコブシ、熱田神宮の太郎庵^{たろうあんづばき} 椿などが挙げられています。

市内の樹叢のうち、中心部にありながら、大規模なものとして、熱田神宮の社叢があります。クスノキ、クロガネモチなどの照葉樹林と、ケヤキやムクノキの落葉樹林が混在し、林床にはウラシマソウ、ヤマアイなどがみられます。クスノキには、社叢を代表する巨樹が含まれます。

市域東部の丘陵地にある浸食谷には湧水湿地が数多く形成され、貴重な植物が確認されています。このうち、東谷山の南西部の湿地では、シラタマホシクサ、サギソウ、ヌマガヤなどの湿地植物が確認され、湿地周辺にはシデコブシの群落がみられます。スダジイ、アラカシ、ツブラジイなどの常緑樹林が広がる山地も含めて、東谷山は愛知県自然環境保全地域に指定されています。

地質鉱物 本市では文化財指定されているものはありません。

東谷山周辺は、山塊の大半を占める中古生層（ホルンフェルス）、東谷山の西側に露頭する花崗岩類、南側の丘陵部に分布し、陶土原料となる瀬戸陶土層、東谷山西麓の高位・中位段丘など、さまざまな地質がみられる貴重な場所です。

（6）文化的景観

文化的景観は、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」を指します。

文化的景観のうち、特に重要なものは都道府県または市区町村の申し出に基づき、重要文化的景観に選定されますが、本市にはありません。



図 70 名古屋城のカヤ

(7) 伝統的建造物群

名古屋市有松（緑区）が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

本市では、昭和 58 年（1983）制定の名古屋市町並み保存要綱に基づき、東海道沿いに絞商の商家が建ち並ぶ有松、名古屋城下町東部の武家屋敷地であった白壁・主税・^{しらかべ}主税・^{ちから}主税・^{しゅもく}主税（東区）、城下町の西部の堀川沿いに位置する商人地であった四間道（西区）、名古屋城下から岩倉方面に至る岩倉街道沿いの



図 71 有松

集落である中小田井（西区）の 4 地区を町並み保存地区に指定しています。有松は、町並み保存地区の指定後、平成 28 年（2016）に旧東海道沿いの範囲が重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

有松は、慶長 13 年（1608）、尾張藩によって東海道の鳴海宿と池鯉鮒宿^{ちりゅうじゅく}の間に開かれ、旅人の土産物として考案された絞り染めとともにまちが発展しました。幕末ごろに、おもに草葺きあるいは板葺き屋根であった商家は、火災に備えた瓦葺・塗籠造^{ぬりごめづくり}のものへと変わっていき、現在みられる重厚な町並みが形成されました。白壁・主税・主税・主税は、元は中級武家屋敷が建ち並んでいた地域で、大正時代から昭和初期にかけて陶磁器関係の貿易商のほかに、名古屋を代表する財界人などが移り住むようになり、広大な敷地に質の高い和風住宅や近代洋風建築などが建てられました。四間道界限は、堀川の舟運を利用した商人の活動とともに発展したまちで、現在も城下町の商人地であったことを示す土蔵や伝統的な建造物が残っています。



図 72 四間道

町並み保存要綱制定時に、上記の 4 地区以外で町並み保存の対象候補とされ、現状未指定のものに、旧東海道の宿場町である鳴海（緑区）、城下町のうち下級武士の居宅群が並んでいた黒門町・百人町^{くろもんちょう ひやくにんちょう}（東区）、東海道の脇往還である佐屋街道の宿場町であった岩塚、万場（中川区）があります。

(8) 埋蔵文化財

本市域においては、旧石器時代から近世、近代までの周知の埋蔵文化財包蔵地が 945

カ所登録されています。

旧石器時代 熱田台地及び東部の丘陵上から、石器が散発的にみつかっています。

縄文時代 熱田台地、東部の丘陵上及びその縁辺部に、縄文時代の遺跡が分布しています。中期の終わりごろからは、北・西部の沖積地にも遺跡が残されるようになります。草創期から早期の遺跡が、旧石器時代の遺跡も含めて、現在の海、沖積層の下に埋没している可能性があります。

弥生時代 前期には、庄内川流域の沖積地の微高地上に集落が営まれるようになります。水稻耕作の広がりによって、低地部の開発が進んだためです。熱田台地上にも集落が営まれ、中期後葉から後期にかけて、台地の南部や東部の丘陵縁辺部に集落が広がっていきます。後期には、海を臨む台地上に環濠^{かんごう}をめぐる集落が出現します。

古墳時代 古墳は熱田台地や丘陵部を中心に確認されています。古墳として登録されているものが204カ所あるほか、集落遺跡の発掘調査において削平された古墳が発見されることがあります。集落は弥生時代に引き続いて台地などに分布します。中期前半には、須恵器生産の技術が当地に伝わり、丘陵部に須恵器窯が築かれます。

古代 集落は熱田台地上を中心に分布し、なかには出土遺物や遺構から官衙^{かんが}が存在したと推定される遺跡があります。寺院は集落と同じく、多くが台地上に営まれています。窯が築かれる場所は南東部の丘陵上にも広がり、灰釉陶器^{かいゆう}・緑釉陶器^{りよくゆう}が生産され、全国各地に広く流通しました。

中世 集落は熱田台地上に加え、沖積地の川沿いにも営まれます。川湊として機能していたものもあったと考えられます。戦国時代を中心に、台地上及び丘陵部の縁辺には数多くの城館が立地していました。東部の丘陵上には、日常用の雑器として使われた山茶碗^{やまぢやわん}を焼成する窯が多数築かれました。

近世 近世の周知の埋蔵文化財包蔵地は、多くが名古屋城やその城下町にかかわるもので、わずかながら新田開発に伴う新田堤防や窯跡が含まれます。現在のところ、名古屋城下町、及び鳴海、熱田の宿場町の大部分は、周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されていません。

(9) 文化財の保存技術

文化財保護法では、「文化財の保存技術」のうち、保存の措置を講ずる必要があるものを「選定保存技術」として選定し、その保持者や保存団体を認定する制度があります。

本市では、鈴木理之氏^{すずきまさゆき}が「能楽小鼓^{こつづみ}（胴・革）製作修理」保持者として国選定保存技術保持者に認定されています。

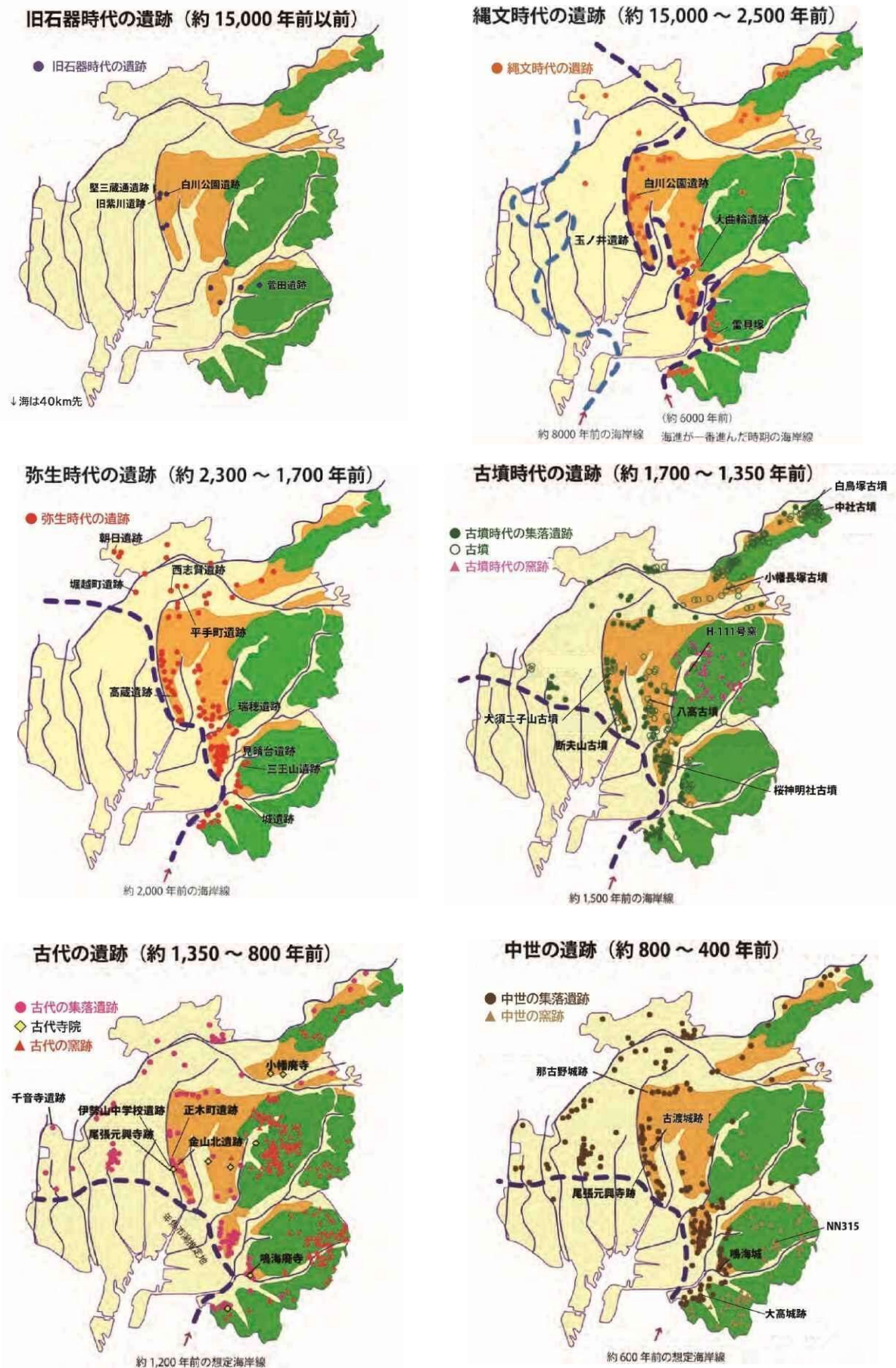


図 73 各時代の遺跡の分布

能楽小鼓の胴は桜材に漆を塗ったもので、革は馬皮を鉄輪に張ったものに、補強と装飾のため一部に漆を塗っています。それぞれの胴にふさわしい革を組み合わせる作業も熟練が必要です。鈴木氏は、胴を彫り出して漆で仕上げ、革を製作して組み合わせるという工程を一貫して行っています。



図 74 鈴木理之氏

3 関連する制度

(1) 日本遺産

日本遺産は、文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を図るために、その歴史的経緯や、地域の風土に根ざした世代を超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえたストーリーの下に有形・無形の文化財をパッケージ化したもので、文化庁よりストーリーの認定を受け、情報発信や人材育成・伝承、環境整備などの取り組みを進めるものです。

世界遺産登録や文化財指定は、いずれも登録、指定される文化財（文化遺産）の価値づけを行い、保護を担保することを目的とします。一方で日本遺産は、既存の文化財の価値づけや保全のための新たな規制を図ることを目的としたものではなく、地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている点に違いがあります。

現在、日本全国で104のストーリーが認定されているなかで、本市では、有松（緑区）の絞りを中心的なテーマとした「江戸時代の情緒に触れる絞りの産地～藍染が風にゆれる町 有松～」が、令和元年度に日本遺産の認定を受けています。

タイトル

江戸時代の情緒に触れる絞りの産地～藍染が風にゆれる町 有松～

ストーリーの概要

どこまでも広がる藍色の空の下、藍で染められた絞り暖簾が風にゆれる古い商家の落ち着いた佇まい。絞りの町「有松」には、江戸時代の浮世絵さながらの景観が今も静かに広がっています。

「ほしいもの 有松染めよ 人の身の あぶら絞りし 金にかえても」

この歌を詠んだ『東海道中膝栗毛』の主人公の弥次さんは、絞りの素晴らしさに魅せられて手拭いを買いました。旅のお土産として、世界に知られている有松の絞りはいかがですか。

四百年の歴史を持つ有松の江戸文化は、今も多くの人々を魅了しています。

表 11 日本遺産の構成文化財一覧

No.	文化財の名称		指定等	No.	文化財の名称		指定等
1	名古屋市有松伝統的 建造物群保存地区		重要伝統的建造物 群保存地区	23	西町年行司		未指定
2	服部家住宅（井桁屋）		県有形（建造物）	24	延命地藏尊		未指定
3	服部幸平家住宅倉		県有形（建造物）	25	竹田庄九郎碑 鈴木金蔵碑		未指定
4	服部良也家住宅		未指定	26	有松小学校飾り門		未指定
5	竹田家住宅 （竹田嘉兵衛商店）		市有形（建造物）	27	勝海舟の掛軸		未指定
6	竹田家茶室 さいしやうあん 裁松庵		市有形（建造物）	28	各地の博覧会の受賞表彰状		未指定
7	小塚家住宅		市有形（建造物）	29	頼山陽自筆の漢詩の扇		未指定
8	岡家住宅		市有形（建造物）	30	服部家の嫁入り駕籠		未指定
9	都市景観保存樹 クロガネモチ		未指定	31	有松天満社		未指定
10	中濱家住宅（中濱商店）		国登録有形	32	虹橋		未指定
11	棚橋家住宅		国登録有形	33	有松天満社文嶺講		未指定
12	有松祭りの 山車行事 （有松天満 社秋季大 祭）	じんぐうこうごう 神功皇后車 （西町山車庫）	市無形民俗	34	弘法堂		未指定
13		唐子車 （中町山車庫）		35	中町地藏堂		未指定
14		布袋車 （東町山車庫）		36	秋葉五社		未指定
15	有松山車会館		未指定	37	東海道・有松の歌碑		未指定
16	山田家住宅（旧山田薬局）		未指定	38	有松一里塚		未指定
17	近藤家住宅		未指定	39	東海道		未指定
18	旧竹田庄九郎家住宅		未指定	40	長坂道		未指定
19	神谷家住宅（神半）		未指定	41	有松天満社切通しと常夜燈		未指定
20	服部家住宅（いげ十）		未指定	42	藍染川（手越川）		未指定
21	有松・鳴海絞会館 と絞りの資料		未指定	43	有松・鳴海絞の製造技術 及び製品		未指定
22	祇園寺、仏足石、 光明皇后恭仏跡歌碑、 三十三観音、十六羅漢像		未指定				

(2) 「世界の記憶」

「世界の記憶」は、世界的に重要な記録物への認識を高め、保存やアクセスを促進することを目的とし、ユネスコが平成4年（1992）に開始した事業です。その事業を代表するものとして、人類史において特に重要な記録物を国際的に登録する制度が平成7年（1995）より実施されています。

ユネスコにおいて日本関連として登録されている物件のうち、「朝鮮通信使に関する記録－17世紀から19世紀の日韓間の平和構築と文化交流の歴史」（平成29年〈2017〉登録）の記録物に、本市所在の古文書が含まれます。

「朝鮮通信使に関する記録」は、慶長12年（1607）から文化8年（1811）までの間に、日本の江戸幕府の招請により12回、朝鮮国から日本国へ派遣された外交使節団に関する資料です。日本と韓国に所在する外交記録、旅程の記録、文化交流の記録などの計333点で構成されます（うち、日本所在資料は209点）。

表12 「朝鮮通信使に関する記録」に含まれる本市所在の古文書

名 称	分 類	所 蔵
こうしんかんじんらいへい き じ 甲申韓人來聘記事	旅程の記録	名古屋市蓬左文庫
ちようせんじんがつ きじようきよう よ の ず 朝鮮人物旗仗輜輿之図	旅程の記録	名古屋市蓬左文庫
ちようせんじん ごきようおうしち ごさんぜん ぶ ず 朝鮮人御饗応七五三膳部図	旅程の記録	名古屋市蓬左文庫
ちようせんこくさん し こうせんれん く 朝鮮国三使口占聯句	文化交流の記録	名古屋市蓬左文庫



図75 朝鮮人物旗仗輜輿之図
(所蔵：名古屋市蓬左文庫)



図76 朝鮮人御饗応七五三膳部図
(所蔵：名古屋市蓬左文庫)

第3章

名古屋市の歴史文化の特性

第1章、第2章の内容を踏まえ、歴史文化の特性を、過去の時代の特徴でまとめられる歴史文化の特性と、過去から現在へと引き継がれている歴史文化の特性に分けて整理します。

前者の歴史文化の特性は、原始から中世を対象とする「特性1 海・川の恩恵を受けた原始から中世の暮らし」、戦国時代を主たる対象とする「特性2 戦国武将たち飛躍の地」、近世を対象とする「特性3 名古屋城築城と城下町の繁栄」、近代を対象とする「特性4 近代における工業都市としての発展」の四つに分けます。

後者の歴史文化の特性は、原始から現在に至る熱田の地を対象とする「特性5 熱田神宮、海、街道とともに栄えた熱田」、原始から現在に続いているモノづくりを取り上げた「特性6 受け継がれるモノづくり」、中世・近世の信仰と、近世から現代に息づいている天王信仰や秋葉信仰に注目した「特性7 人々に支えられ、現代に息づく信仰」の三つを設けます。

なお、「名古屋市歴史文化基本構想」では、名古屋の文化財の特徴を特徴1～5に分けていますが、その各特徴と本計画における歴史文化の特性の対応関係は図78のとおりです。特性2と特性7は新たに設けたもので、歴史文化基本構想から引き継いだそのほかの特性は内容の見直し、修正を行いました。

第3章

名古屋市の歴史文化の特性

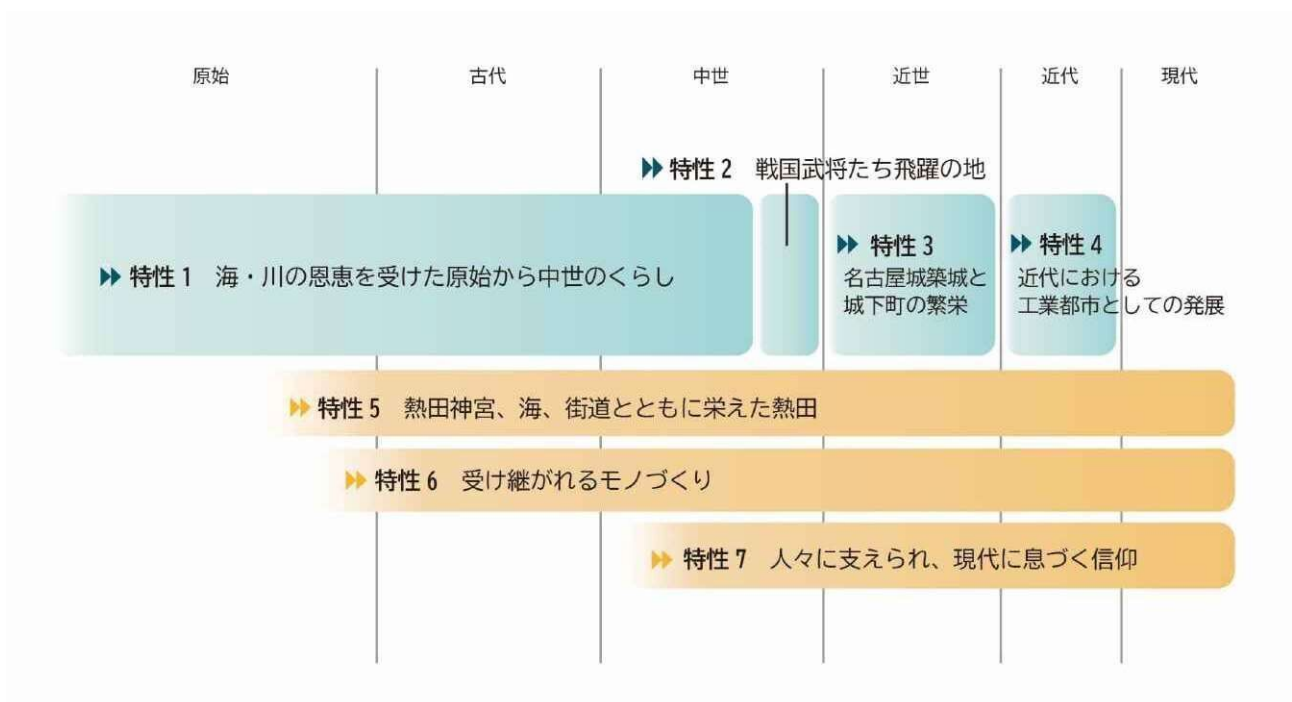


図77 名古屋市の歴史文化の特性

名古屋市歴史文化基本構想（平成 29 年）

名古屋の文化財の特徴

特徴 1

庄内川がはぐくむ古代・中世の文化

特徴 2

いつの時代も熱田があってこそその名古屋

特徴 3

名古屋城下町の誕生と名古屋文化の発展

特徴 4

開かれるウォーターフロント 堀川掘削・新田開発・干拓がもたらした発展

特徴 5

モノづくりが繋ぐ文化

名古屋市文化財保存活用地域計画

名古屋市の歴史文化の特性

特性 1

海・川の恩恵を受けた原始から中世の暮らし

特性 2

戦国武将たち飛躍の地

特性 3

名古屋城築城と城下町の繁栄

特性 4

近代における工業都市としての発展

特性 5

熱田神宮、海、街道とともに栄えた熱田

特性 6

受け継がれるモノづくり

特性 7

人々に支えられ、現代に息づく信仰

図 78 「名古屋市歴史文化基本構想」の「名古屋の文化財の特徴」と本計画の「名古屋市の歴史文化の特性」の対応関係

特性 1 海・川の恩恵を受けた原始から中世の暮らし

定住生活が始まった縄文時代から古代、中世において、人々は海に近い場所や、北部から西部を流れる庄内川に沿った場所を主な生活の場としました。

縄文時代は、海、河口に近い小高い場所の縁辺にムラ、貝塚が営まれました。弥生時代には、海に近い台地上や庄内川流域の小高い場所に集落が営まれました。古墳時代は、人々の交通路、物資の運搬路として

利用された川、海、陸路を見下ろす場所などに大小の古墳が造られました。古代には、台地の縁辺部や庄内川沿いの主要交通路の近くに官衙^{かんが}が置かれました。古代末～中世に、庄内川などの河川が流れる沖積低地が広く開発され、多くの荘園が設けられました。庄



図 79 見晴台遺跡

内川の下流域に位置した^{とみたのしょう}富田 荘 は詳細な絵図が残されており、当時の土地利用の状況を知ることができます。

海・川がもたらす恩恵を受けて、人々はたくましく生活を営んできました。

特性2 戦国武将たち飛躍の地

室町時代から戦国時代にかけて、名古屋には多数の城館が築られました。多くの中小の領主が活動していたことがわかります。

名古屋は、群雄割拠の戦国の世から天下統一を進めた織田信長、豊臣秀吉、徳川家康ゆかりの地であるだけでなく、前田利家、加藤清正、柴田勝家など多くの戦国武将を輩出しました。



図 80 大高城跡の出土品

また、日本史の転換点の一つである、信長と今川義元の間で行われた桶狭間の戦いは名古屋南東部を舞台としました。戦いに勝利した信長は美濃さらには畿内へと進出する足がかりを得、義元の配下にいた家康はやがて今川氏からの自立を果たしました。

名古屋は、数多くの戦国武将が飛躍していった場所といえます。

特性3 名古屋城築城と城下町の繁栄

現代における名古屋中心部の町のかたちは、慶長15年（1610）に徳川家康の命により築城が始まった名古屋城と、清須からの町、住民の移動（清須越^{きよすごし}）を伴ってつくられた城下町を出発点とします。城下町は、武家地・町人地・寺社地が機能に応じて計画的に配置され、家康の理想が十分に反映されたと考えられます。城・城



図 81 名古屋城跡

下町の建設に際し、主に物資の輸送路として開削された堀川は、その後の城下町の暮らしを支えました。

城下町では、南画や復古やまと絵、浮世絵などさまざまな画派が登場した絵画、友禅・陶磁器・刀・尾張鐔・仏具などの工芸品、^{あまの さだかげ}天野信景・^{かわむらひで ね}河村秀根・^{すずき あきら}鈴木 脛・^{いとうけいすけ}伊藤圭介など多くの学者が生まれ、発展した学問、松尾芭蕉の影響を受け、優れた俳人が輩出された俳諧、ベストセラーとなった『北斎漫画』など多数の本の出版、尾張藩の庇護を受けた

能狂言、藩主のみならず武士・町人まで広まった茶道、からくり人形を乗せた山車が登場する祭礼行事など、多様な文化が花開きました。

城下町の形成が、現代における都市としての名古屋の第一歩となりました。

特性4 近代における工業都市としての発展

明治22年(1889)に名古屋駅を通る鉄道路線が全線開通したことにより、名古屋では繊維・陶磁器・時計などの近代工業が発展しました。工業の発展に伴って、大量の製品・原材料を運ぶことができる海上輸送の重要性がますます高まり、熱田港が改修され、明治40年(1907)に大型船が着岸できる名古屋港が開港しました。また、名古屋港開港にかかわって、精進川が製品等を輸送する運河として改修され、明治43年(1910)に新堀川が完成しました。同年には、精進川改修の残土を用いて整備された鶴舞公園で第10回関西府県連合共進会が開かれ、出品された工業製品は、名古屋における工業の水準の高さを知らしめることとなりました。



図82 鶴舞公園噴水塔

近代工業の発達に伴い、名古屋は工業都市としての色彩が強まっていきました。

特性5 熱田神宮、海、街道とともに栄えた熱田

熱田は、原始・古代から、伊勢湾の海上交通と河川・陸上交通が結びつく重要な場所でした。当地には、原始ないし古代から熱田社(現熱田神宮)が鎮座しています。熱田社の門前町として発展した熱田は、中世の終わりごろには、町の経済力に目をつけた織田信秀・信長の庇護を受けました。江戸時代には、東海道有数の宿場町として多くの人で賑わい、伊勢の桑名宿との間は「七里の渡し」と呼ばれた海路で結ばれていました。



図83 熱田まつり

熱田神宮では、平安時代の宮中行事の流れを受けた踏歌神事などの神事・芸能が伝えられています。江戸時代以前から大山と車楽おおよま だんじりと呼ばれる古い形態の山車が曳かれ、熱田

の町民によって支えられた^{みなみしんぐうしゃ}南新宮社天王祭は、形を変えながらも現在に続いています（熱田まつり）。

門前町、湊町、そして宿場町として栄えた熱田は、名古屋の歴史文化の成り立ちを語るうえで欠くことができない場所です。

特性6 受け継がれるモノづくり

名古屋では、東海地方で最も早く古墳時代の5世紀前半に、現代の窯業へとつながる須恵器生産が開始されました。平安時代には、美しい花の文様が彫られた^{りよくゆう}緑釉陶器が生産され、高級品として京の都などに運ばれました。

江戸時代、名古屋城下では尾張藩領の木曾から運ばれてきた良質な木材が流通し、^{たんす}箆筥、^{ししやかた}仏壇、獅子屋形などの木材加工業が盛んになりました。また、東海道沿いの有松・鳴海では絞り染めが発展し、尾張を代表する特産品として広く知れ渡りました。

明治時代には、瀬戸・美濃から陶磁器の素地を取り寄せ、上絵付けを行う輸出陶磁器業が盛んになりました。やがて素地生産も行う大規模陶磁器メーカーが現れ、^{がいし}碇子製造にも進出しました。陶磁器業と並び、近代名古屋の発展に寄与した紡織業に関連して、^{とよだ さきち きいちろう}豊田佐吉と喜一郎は大正13年(1924)に画期的な自動織機を完成させました。そのほか、明治時代後半～大正時代に時計や鉄道車両の製造、合板の生産などが発展しました。

受け継がれてきたモノづくりの文化が、現代の名古屋の礎となっています。



図84 有松・鳴海絞

特性7 人々に支えられ、現代に息づく信仰

鎌倉時代、関東や大和の諸寺で仏教を学び、^{ちようぼ}長母寺の住職となった^{むじゅう}無住は、都から離れた尾張の地で民衆に仏教を広めるとともに、仏教説話集の『^{しゃせきしゅう}沙石集』などを著しました。平安時代末ごろから武士や庶民の間に広まっていった地蔵菩薩への信仰を背景に、尾張では鎌倉・室町時代を中心に^{ちゅうてつせい}鑄鉄製の地蔵菩薩（鉄地蔵）が数多く制作されました。



図85 筒井町天王祭の山車行事

江戸時代、尾張徳川家は浄土宗の相応寺、建中寺などの寺院のほか、家康を祀った東照宮、将軍家御霊屋を造営しました。尾張徳川家の菩提寺である建中寺には、歴代藩主などの御霊屋※1が営まれました。

江戸時代には民衆の間にさまざまな信仰が広まりました。その代表的なものが津島神社を拠点とする天王信仰と、秋葉神社を中心とする秋葉信仰です。疫病よけの天王信仰は、旧暦6月に天王祭が行われ、大きな天王社では山車などが出る華麗な祭礼が催されました。明治時代以降、民家が密集する町中では、家の屋根上に津島神社、秋葉神社、熱田神宮を祀る小さな祠（屋根神）が数多く設置され、独特の景観を見せていました。

江戸時代を通じて民間に浸透していった信仰は、現代の暮らしにも息づいています。

※1 建中寺では御霊屋を「ごれいや」と呼ぶ。

第4章

文化財に関する既往の把握調査

市内の文化財に関する把握調査のうち、国、愛知県、名古屋市が主体となって、文化財の類型ごとに所在や内容等を記録した調査は表13のとおりです。ほかに、大学などの研究機関やその他団体、個人による把握調査も実施されていますが、本市において、そうした調査成果の取りまとめは十分にできていません。

類型ごとの把握状況をみると、有形文化財の建造物、記念物の遺跡、伝統的建造物群は調査が進んでいる一方で、有形文化財の美術工芸品、有形の民俗文化財は民間が所有するものも含めた把握調査は十分ではありません。無形文化財、無形の民俗文化財は詳細な調査が不足しており、記念物の動物・地質鉱物は文化財指定を視野に入れた把握調査は行われていません。今後も、継続的に把握調査を進めていくことが必要です。

表13 既往の把握調査一覧

調査主体	類 型	年	書籍名等
文化庁	建造物	2014	『近代遺跡調査報告書-政治（官公庁等）-』
		2014・15	『近代遺跡調査報告書-軽工業-』
		2018・19	『近代遺跡調査報告書-交通・運輸・通信業-』
	美術工芸品	1995	『文化財集中地区特別総合調査報告書 愛知県の文化財』
		2014 年度	国指定文化財（美術工芸品）の所在場所確認調査
	記念物・埋蔵文化財	1975	『全国遺跡地図（愛知県）史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地地図』
	名勝地	2012	『近代の庭園・公園等に関する調査研究報告書』
		2013	『名勝に関する総合調査-全国的な調査（所在調査）の結果-報告書』
	文化的景観	2005	『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究（報告）』
		2010	『採掘・製造・流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究（報告）』
環境庁	植 物	1991	『第4回自然環境保全基礎調査-日本の巨樹・巨木林-』
愛知県	建造物	1975	『愛知の民家-愛知県民家緊急調査報告書-』
		1980	『愛知県の近世社寺建築-近世社寺建築緊急調査報告書-』
		2005	『愛知県の近代化遺産 愛知県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』
		2006	『愛知県史 別編 文化財1 建造物・史跡』
		2007	『愛知県の近代和風建築-愛知県近代和風建築総合調査報告書-』
	美術工芸品	2011	『愛知県史 別編 文化財2 絵画』
		2013	『愛知県史 別編 文化財3 彫刻』
		2015	『愛知県史 別編 文化財4 典籍』
		2018	『愛知県史 別編 文化財5 工芸』
	無形文化財・ 無形の民俗文化財	1981	『愛知の民謡-昭和54・55年度民謡緊急調査報告書-』
		1986	『愛知の諸職-諸職関係民俗文化財調査報告書-』
	民俗文化財	1989	『愛知県文化財調査報告書第55集 愛知の民俗芸能-昭和61～63年度 愛知県民俗芸能総合調査報告書-』
		1991	『あいちの民俗芸能』
		2001	『あいちの祭り行事-あいちの祭り行事調査事業報告書-』
	記念物	1923～1942	『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』1～20